



大阪公立大学共同出版会

ニュースレター

No.20

Osaka Municipal Universities Press(OMUP)

目 次

・理事長 新年の挨拶	三田 朝義 1	・第20回OMUPサロン(公開)のご案内 6
・OMUP新春インタビュー 八木 孝司教授			・新顔紹介 6
インタビュアー：常務理事 足立泰二 2		・編集後記 6
・書籍出版の未来予測	金井 一弘 4		
・私の共編著『生物間ネットワークを紐とく』を語る				
	難波 利幸 5		

理事長 新年の挨拶



OMUP理事長 三田 朝義

大阪公立大学共同出版会（OMUP）会員の皆様、2010年の新しい年をお健やかに迎えられたことと拝察申し上げます。OMUPは、これまで多少の紆余曲折はありましたが順調に、会員の皆様の大きな支援のもとに今年で創立10周年を迎えることとなりました。しかしながら、昨今のデフレスパイラルの大波に加えてOMUPが立脚する柱の一つでもある大阪府立大学の理念をも変えるような大改変がなされようとしている中にあって、OMUPのこれからの方針を会員の皆様とともに真剣に考えていかなければならない時期にさしかかっているように思います。

テレビに代表される映像や音響に乗ったいわゆる情報文

化は一見ビビッドに見えますが、私たちを受け身にした、エントロピーを増大させるだけの無秩序な切れ切れの文化である場合が多いように思えます。一方、エジプトから略奪された後に大英博物館に展示されているロゼッタ・ストーンや日本古来の木簡に見られる活字文化は、私たちに情緒力や創造力を与えてくれるのではないかでしょうか。これまで車中で多く見られた読書する姿はほとんど消え、それに取って代わって携帯でメールする姿が目立つようになりました。昨今、これまでに構築された文化の瓦解が始まっていることと若者をはじめとする現代人に見られる活字離れが全く無関係とはどうしても思えません。

活字によって養成されるであろう知を創造する力は、文系のみならず理系で学ぶ大学生にとって不可欠であるとともに、それを活性化することがOMUPの大きな役割ではないでしょうか。同時に、OMUPは単に出版の数にこだわるのではなく、これまで以上に良書を出版することがこれから課題であるように思えてなりません。

新年早々、思いつくままに毎年書いているような戯れ言を述べましたが、OMUPをさらに発展させるために、会員皆様の積極的なご意見を賜りますようお願い申し上げます。

OMUP新春インタビュー

大阪府立大学産学官連携機構
大学院理学系研究科
(OMUP理事)

八木 孝司教授

インタビュアー：OMUP常務理事 足立 泰二



八木 孝司 教授

足立常務：新年あけましておめでとうございます。日頃は大阪公立大学共同出版会に会員として、また理事としてご協力いただき、ありがとうございます。

八木教授：あけましておめでとうございます。ほとんど私はお役に立てていなくて申しわけありません。常務理事の先生がたがよく活動していただいているおかげで出版会は成り立っていると思っております。

足立：とんでもありません八木先生には出版会創立以来、ユニヴァシリーズでもご執筆いただきましたし、一昨年は、「みんなのくらしと放射線」をおまとめくださり、OMUPのベストセラーの一つになっております。

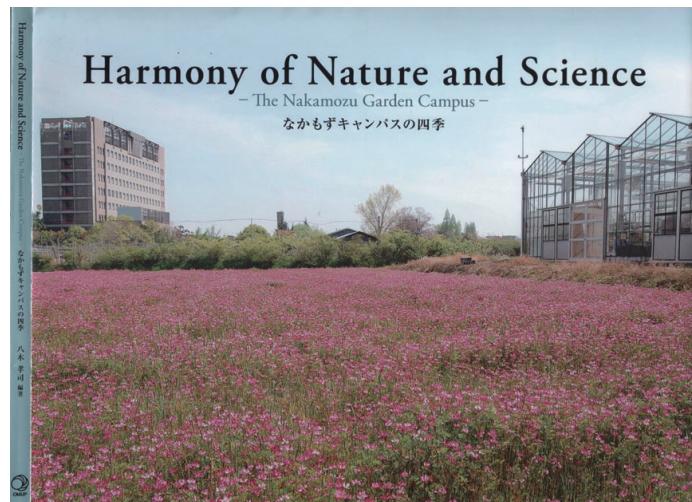
八木：それなら良かったです。それ以外のことはお手伝いできなくて、申しわけなく思っております。

足立：OMUPは今年10周年を迎えるとしており「Harmony of Nature and Science なかもずキャンパスの四季」という府立大学のステータス向上に役立つ本を計画し、先生に編著をお願いしております。ぜひその辺の抱負も含めまして、お聞かせいただきたく思います。

「Harmony of Nature and Science なかもずキャンパスの四季」近刊!!

八木：私は5年くらい前からキャンパスで昆虫や植物の写真を撮っていましたが、本を出すなんて夢にも考えてなくて、そのような話になり非常に嬉しく思っています。それからあと3名のかた、平井規央先生、中村彰宏先生、大江真道先生も写真を撮っておられて、はからずも一緒に写真集を出すということで、

内容も豊かになり、非常に喜ばしく思っています。名前は「Harmony of Nature and Science なかもずキャンパスの四季」なのですが、これは二つの意味があると私は思っております。一つは理想とする大学のアカデミックな環境です。サイエンスをしていく敷地があり、きれいな建物があり、そのなかで一流の研究をしている。その敷地も自然が豊富で緑豊かな素晴らしい環境である。アメリカの大学みたいに美しい街と大学の敷地が一体となって、どこまでが街でどこまでが大学かわからない、芝生が一面に続いているようなああいうイメージです。もう一つは大学の研究についてです。今は研究といいますと、どうしても応用研究が中心になっていると思いますが、基礎研究も非常に大事です。その基礎研究のきっかけというのは、物事を不思議に思うことだと思うのですが、生物はその不思議の宝庫であると思うのですね。生き物を見て不思議だと思って、それからそのメカニズムを調べようと思うのが本当の研究のきっかけだと思う。そのような役に立たないような基礎研究、つまり生物の生きているメカニズムを探るという研究と応用研究とがハーモニーになれば良い、という二つの意味で素晴らしいタイトルだと思います。



足立：この本がほぼ完成に近くなっているのですが、先生が今おっしゃっていただいたとおり、サイエンス、学問のベースに、環境が大事だと思うのです。周囲にそういう自然があり、感性豊かなサイエンティストが育つ、八木先生に私どもがかねがね感じております印象です。

八木：お恥ずかしい限りです。

足立：「府立大学ここにあり」というような、府立大学の良さを宣伝できる本になると大いに期待しています。

八木：いわゆる普通の写真集ではなくて、大学のアカデミズムから発信する内容にふさわしい、キャンパス内の自然を表した写真と説明を入れていきたいと思っています。

足立：さて、年頭に当たりまして、先生ご自身の抱負と出版会への注文をお聞かせいただけるとありがたいのですが。

八木：私個人の抱負といたしましては、自分自身の研究が今年もますます発展するようにやっていきたいと思っています。昨年、一昨年と忙し過ぎました。ある学会の会長、それから他の学会の理事なども引き受けさせて、学外の仕事が非常に多く、研究を落ち着いてできなくて、それが非常に大きな反省でありました。研究の発展と研究周辺のいろいろな学問領域のことを、もう少し深く考える思索の時間を持ちたいと思っております。

足立：今年も国際会議は何かご計画があるのですか。

八木：昨年は国際環境変異原学会がイタリアであったのですが、今年はアジア環境変異原学会がタイであるのが決まっておりまして、それには立場上どうしても参加しないといけないのです。一度学会に招かれると断るのが大変ですね。

足立：特に今は温暖化とともに環境がいろいろ変わるし、ご専門とお役目上大変重要なお立場ですしね。

八木：日本の環境汚染というのはほとんどなくなってきて、非常にきれいな環境になったと思いますが、アジア、中国、インドとかが今ひどくて、私の所属している学会では、そのような国と連携し、過去日本が蓄積してきたいろんなノウハウを、そういう経済発展している国に伝えたいと思っています。

足立：確かに現地のお国柄にあわせた状態で、ご指導やアドバイスをされるようなお役目があろうかと思います。ご苦労さまです。さてOMUPも10年近くになりますが、初期は任意団体としてスタートし、5年近く前にNPOになりました。10年間で出版点数50点、さらに私ども飛躍を念じております。先生のご希望なりご期待なりをお聞かせいただくとありがたいです。

出版こそ大学の中核的機能なり！

足立：それにつきましてちょっと良いお知らせができるのではないかと思います。大学の情報発信の中核である図書館が、電子書架という形で機関レポジトリを実施し、大阪府立大学も外部からの資金を受けてレポジトリを重視していくとされているのです。そちらからの申し越しでOMUPも協力する方向で考えています。私どもはおそらく大学にそういった形で情報を提供しますと、ちゃんと読みたくなりお買い求めいただくこともあるだろうし、よりステディな書架になるだろうと思います。

八木：レポジトリというのは電子出版ですよね。単行本になった本の全ページを電子化して公開するのでしょうか。

足立：それはもちろん著者の了解を得た上で、しかも著作権で許される範囲での登載となるでしょう。すでに京都大学と京都大学学術出版会が連携をスタートしています。本を出版されたかたも大学への貢献であるし、大学にとっても社会への貢献ですので、協力・連携を願っています。

八木：連携といいますと日本の全部の大学出版会が連携してブックフェアなどを大都市で行なう。たとえば1週間ずつ各都市を回るというような企画はいかがでしょうか。

足立：大学出版部協会というのがあり、東京で毎年ブックフェアをやっています。何しろ出版業界の大きさに比べますと、大学出版会はホットスポットにはならない。実は私どもは、創立5周年を記して関西周辺の大学出版部に声をかけ、大阪の大手の本屋で1ヶ月間ブックフェアをしました。そういうのを何年かに1回は催したいと思っています。大学の生協にも依頼して年1回ブックフェアをしておりませんので、是非、生協の書籍部に足を運んでいただければ幸いです。

八木：私はウェブの本屋をよく利用して買うのですが、本のタイトルやキーワード、あるいは著者がわかっていると検索するのは簡単なのですが、いわゆる本屋さんみたいに並んでいて、これが面白そだから買いたいというような買いかたはできないですね。それが欠点だと思います。たとえば背表紙だけでも本屋のようにパソコンの画面で見えていて、その本をクリックしたら、目次と前書きくらいが見え、それを読んで気に入れば注文するっていう、そういうインターネットショップといいますか、バーチャル本屋さんがあればいいのになと思っています。そういうシステムはOMUPだけでは無理かもしれませんのが、大学の出版会全体で取り組みをしたら売上が増えるのではないかと思うのですけれど。

足立：出版をすることの重要性を認識している大学出版部協会との連携も持ちたいというものは視野に入れているつもりです。良いご指摘いただきありがとうございました。私どもいっそ真摯に考えてまいります。

八木：あとは本を作るほうにも、買うほうにも、広報のしかたでOMUPは発展していくと私は思います。

足立：ものごとの未知なことへの疑問や従来の解釈への批判をし、さらに主義・主張を展開する形で出版をする場合には、私どもOMUPを大学が利用していただけると思うのですが、その辺の先生のご意見はいかがでしょうか。



足立泰二OMUP常務理事

出版を通じて地域社会貢献を！

八木：文化系と理科系、客観的に見てどちらが地域貢献しているかといえば、私は文科系のほうが大きいのではないかと思います。一般のかたは、歴史や文学、経済学に大変興味をお持ちで、そういう公開講座をしたらすごい数のかたが集まられる。それに対し理科系の講座にはせいぜい20人とか30人。一般のかたの文化系の知識欲求はとても大きいと思います。だから出版会もそういう分野の本を出していけば社会貢献もできるし、もちろん買ってくださるかたも多いと思います。

足立：自然科学も「科学文化」といわれるよう文化的な営みだと思います。

八木：我々は理科系で生物学をやっているわけですが、研究の根源というのは日本人独特の自然観から始まっていると思います。日本人は、万葉集の頃からか源氏物語の頃からかわかりませんが、自然に対して非常に繊細な感性、「もののあわれ」という感性を持っていますよね。私は文系でないから間違っているかもしれません。美しい、不思議だ、悲しいという気持ちがあり、それがなぜだろうという解析から研究が始まっているのではないかと私は思うのです。

足立：物に対する感性と着想、それがある意味ではサイエンスのモチベーションになると思いますよね。

八木：私はモチベーションこそ大切だと思います。それと私の個人的なもう一つの興味なのですが、日本人はすごく虫が好きなんです。江戸時代からコオロギや鈴虫を飼育して鳴き声を聞いて詩を詠むという文化がありますね。それから江戸末期から博物学がすごく流行し、それは我々が子供の頃の昆虫少年に受け継がれてきたわけですね。それはなぜだろうと歴史的な視点で思うわけです。時間のあるときに本でも読んで明らかにしたいと思っております。

足立：今回の「キャンパスの四季」の本の次に、ぜひまた、OMUPから本を出版していただけることを願っています。新春早々からお忙しい先生に貴重な時間を割いていただきましたが、私どもも先生からのご指摘を考慮し、さらに発展させていきたいと願っていますので、今後とも変わらぬご協力をいただきたいと思います。どうもありがとうございました。

八木：ありがとうございました。

「書籍出版の未来予測」

OMUP編集長 金井 一弘
株式会社星湖舎 代表取締役

日本の書籍は、積み重ねられた歴史と工夫で、ほぼ完璧な形態で読者の手元に届いている。装丁やレイアウト、印刷・製本の技術、どれをとっても高レベルの中で個性を競い合っている。

ところが、その書籍をとりまく環境が、いま変貌しようとしている。それは、出版業界そのものの変容でもあると言えよう。

書籍と並んで出版の大きな柱である雑誌が、相次ぐ廃刊で存続の危機にある。その未来は絶望的だ。

では、書籍の置かれている立場を検証しつつ、未来予測を展開していこう。

書籍だけで生き残る出版社は小型化されていく

そもそも、出版業界はその商いの規模、会社形態とも、中小企業の集まりである。講談社や角川書店やあまたの出版社がよってたかっても、印刷業界の雄、例えば大日本印刷1社と年間の売上高は同じ規模でしかない。ところが、そのような業界の中で、出版の形態が自費出版に変わろうとしている。これまで商業出版は、増刷で利益を出していくという構図が、完全に壊れてしまった。それに比べ、自費出版は健全な出版形態であるのは当然のことである。

印税は売れた部数しか払われなくなる

印税は売れた部数しか払われなくなる

印税とは、著作権使用料のことである。印税は、初版発行時点で著者に発行部数分の印税全額が支払われている。発行部数で印税を支払い、さっさと著者との経理上の関係を終わらせたいのが出版社の本音である。

ところが、本が売れなくなり、出版社の経営が苦しくなる今後、印税支払い方法が見直されること必至である。出版社の体质改善の上で、おそらく印税の支払いは実売部数での支払いに変わって行くであろう。

印税で生活しているプロの作家には、ゆゆしき問題ではある。

著者が直接読者に本を販売する

出来上がった本は、出版社から取次を通り書店の店頭に並び読者の手に渡る。この「著者→出版社→取次→書店→読者」の流れが、出版流通の根幹をなすシステムである。

本が少部数しか売れないことになると、今の流通形態は維持できなくなる。それ以上に、インターネットで全国どこからでも書籍の情報を発信でき、かつ注文を受けることが出来るのであれば、著者にとって少しのマージンしか得られない今の流通システムはまったく魅力の無いシステムに見えて来るであろう。

すなわち「出版社→取次→書店」の部分を飛ばして、著者が直接読者に本を販売していくのがはるかに儲かることに気がつくであろう。

いずれにしても、何万部と本が売れないと作者に（出版社にも取次にも書店にも）利益が還元できない今の流通システムは、魅力を失い、それは破綻するであろう。

出版社は次々倒産し書籍の出版点数は減少する

ここ数年、新刊の発行点数は75000点を超え、一日に200点以上の新刊が出版されている計算だ。これは読者にとって本の洪水である。今の出版業界は自転車操業状態である。売れ残って返品される本を、新刊を出すことで補っているのが現状である。これがいつまでも続くはずがない。おそらく出版社の倒産ラッシュの一時期を迎えることになると予想される。

出版点数の減少は、本の希少価値を高め、高額な定価設定を可能にし、印税の実売部数による支払いをより可能にする。再販売価格維持制度撤廃にも影響されない。

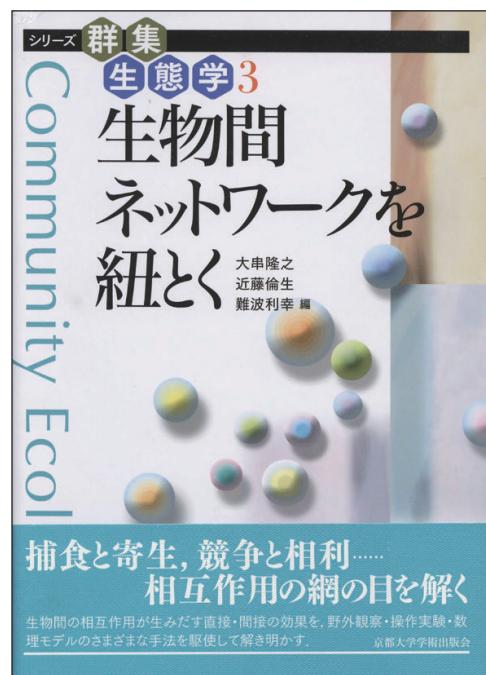
出版点数が落ち着いた未来には、書籍（文化財）を出版する本来の出版社の姿があるであろう。また、金儲けに走る出版社は、書籍以外の他の商材に活路を見いだしているだろう。



※以上の記載は、『星と泉』第4号（2010年1月1日、星湖舎刊、定価525円）にて特集している内容の抜粋です。全12項目で書籍出版の未来予測をしています。ぜひご購読いただき全項目にわたってご参照ください。

私の共編著『生物間ネットワークを紐とく』を語る

大阪府立大学理学系研究科 難波 利幸



この本は、6巻からなる「シリーズ群集生態学」の第3巻として、2009年8月に京都大学学術出版会から刊行されたものである。生態学とは、「生物の個体数と分布を研究する科学」や「生物と生物、生物と環境との相互作用を扱う科学」であり、生物群集とは、複数の種の個体群からなる生物の集まり、要するに地域に生息するすべての生物を集めたものである。地球温暖化などの環境問題の中で、数多くの種が共存するための要因を明らかにしようとする群集生態学は、大きな注目を集め発展しつつある。

この本は七つの章と二つのコラムからなり、生物群集は生物間相互作用によって組み立てられているという立場から、生物群集を理解することを試みている。

このシリーズは、網羅的な教科書ではなく、さりとて、個人の研究の解説の寄せ集めでもなく、群集生態学研究の現状を総括し将来の発展の方向を示唆することを目指している。そのため、気鋭の執筆者を集めるだけではなく、多数の校閲者による厳しい校閲を経ていることが特徴である。単に用語や文体の統一を図るだけではなく、紹介されている内容の適否や正確さに厳しいコメントが寄せられ、数回に及ぶ書き直しの結果、章の内容も文章も最初に提出されたものとは全く変わってしまった章も少なくない。多くの校閲者の協力を得ながら、執筆者と編集者が真剣に対峙することによって生まれたのがこの本である。

店頭でカラフルな水玉に彩られた表紙を見つけたらぜひ手に取ってほしい。しかし、この本は学部生が気軽に読めるようなものではない。この本と格闘した読者からのフィードバックを得て、21世紀の群集生態学を切り開いていきたい、というのが執筆者一同の願いである。読者のみなさんの厳しいご批判と建設的なご意見をお待ちしている。

第20回 OMUP サロン(公開)のご案内

新年あけましておめでとうございます。大阪公立大学共同出版会(OMUP)の新刊本の著者を囲み、刊行に至るまでの経緯と思い入れ、エピソードなどをくつろいだ中で語っていただくOMUPサロンも、第20回を数えるまでになりました。今回は昨年に出版された下記お二人をお迎えし、公開形式でサロンを開催いたします。ぜひお誘いあわせのうえ、ご参加ください。

記

日時：平成22年2月5日（金）

PM4:00～PM6:00

場所：大阪市立大学学術総合情報センター1階

「カフェ ウィステリア」

住所：大阪市住吉区杉本3-3-138

電話：(06)6605-3329

交通：JR「杉本町(大阪市立大学前)駅」下車、東へ徒歩約5分

地下鉄御堂筋線「あびこ駅」下車、4号出口より南西へ徒歩約15分

演題：「中世ドイツ語圏宮廷文学と日本の王朝文学

—相互に欠如するものからの対比考察—

松村 篤

(大阪市立大学大学院文学研究科前期博士課程修了)

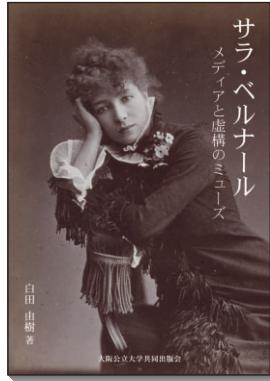
「サラ・ベルナール メディアと虚構のミューズ」

白田 由樹

(大阪市立大学特任講師)

会費：3,000円を当日会場で受け付けます。

新刊書の紹介



サラ・ベルナール

メディアと虚構のミューズ

白田 由樹著(大阪市立大学特任講師)

十九世紀末の演劇界で活躍したフランスを代表する女優サラ・ベルナールの評伝を通して近代社会の時代背景とメディアの展開を浮き彫りにしている。

ISBN978-4-901409-67-4 C3074

定価：3,000円+税 A5判、189ページ



経済学・経営学・法学へのいざない II

大阪府立大学経済学部 編

同名書の続編(II)として、大阪府立大学経済学部のより若い教員陣からのフレッシュなメッセージ。

ISBN978-4-901409-65-0 C1030

定価1400円+税 A5判、189ページ

新顔紹介

森田 治子(もりた はるこ)

大阪公立大学共同出版会 編集担当



このたび、新たに編集を担当させていただくことになりました。私は本来それほど本を読む方ではなかったのですが、通算10年以上欧州で生活して、いつでも日本語の本を読めることのありがたさを痛感しました。普段手に取ることのないいろいろな分野の本に触れることが自身楽しみながら、いくらかでも皆様のお役に立てればと思います。

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

などを行なっているNPO法人です。参加を希望される方は下記事務局へお問い合わせください。

599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)事務局

電話：072-251-6533 ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL：<http://www.omup.jp/>

入会金：一口一万円(終身会費)

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

OMUP創立10周年がやって来ます。そのひとつの節目に相応しく記念出版ともいえる「Harmony of Nature and Science なかもずキャンパスの四季」の刊行が近づいています。編著者としてご尽力いただいている八木孝司先生に新春のインタビューで今年の抱負とOMUPへの「注文」を語って頂きました。自著を語るシリーズとして難波利幸先生にご寄稿いただきました。OMUPからもぜひ「洛陽の紙価を高める学術出版」を目指したいものです。さらに今回はOMUPの金井編集長の「書籍出版の未来予測」を搭載しました。今話題の「新時代の全方位型投稿誌 星と泉」(ジュンク堂には常備)の併読を願いたいものです。時を同じくして電子書籍市場が本格的に始動しそう。これまでの電子辞書の実績からすると、今後我々の主張の重要性が増すことは必定と見ます。

(T. A.)